

大学院へ行こう

顎顔面口腔外科分野 清水志保

はじめまして、顎顔面口腔外科、大学院3年の清水志保です。今回、“大学院へいこう”の執筆依頼をいただきました。みなさんに大学院へ興味をもっていただきたく、僭越ながら私の大学院生活を少しご紹介させていただきます。拙い文章で恐縮ですが、少々お付き合いください。

平成27年3月に日本歯科大学を卒業後、新潟大学のAコースで研修を行いました。そこで実際に患者さんの歯科治療を経験してみて、ほとんどの方が全身疾患を有しており、単に治療手技を習得するだけでなく、それに対応できる力が必要だと感じました。また研修プログラムの3週間の口腔外科・病棟研修で目標としたい先生と出会い、より深く口腔外科を勉強したいという気持ちが大きくなり、顎顔面口腔外科の大学院へ進学しました。

大学院に入ると、1年目は外来・病棟にて口腔外科業務に従事しますが、2年目以降は基礎研究を行います。臨床から離れたくないのが本音でしたが、基礎研究の楽しさを先輩方から勧められ、口腔生理学で研究することになりました。実際に同講座の岡本先生から研究の説明を受け、緊張しながらも、なんだか面白そう！と心が揺らいだのでした。

私が提示された研究内容はざっくり言うと“ストレスと痛み”。学生時代に詰め込んだ、生理学の痛みに関する知識はC線維とかその程度…ほぼゼロからのスタートでした。大縫線核？三叉神経脊髄路核尾側亜核 (Vc)？fos蛋白？わからないことだらけ。歯学部の学生さんに混ざって生理の授業を受けたり、教科書や論文を読んだりしながら、不安な研究生活がスタートしたのでした。

この2年間実験してデータをまとめて発表する、を繰り返し、自分の研究において足りない部

分を補足していきます。幸いなことに、国内学会だけでなく、海外学会にも参加するチャンスをいただきました。同じ分野を研究する学外のプロの研究者たちと会話をすることはとても貴重な機会です。

先日、先輩の論文がacceptされ、今度は私が行ってきた研究を論文にする番です。文章を書くのが苦手な私にとって、論文（しかも英語で…）を執筆することは非常に苦しい作業になりますが、学内外の先生方にご指導いただきながら、頑張っています。自分が出した新しい研究結果を公表できることは、とてもワクワクしますし、このワクワク感を味わうことができるのも、研究の醍醐味です。歯科治療を行っているだけではなかなか味わうことができません。

臨床からは少し離れてしまうけど、少し寄り道して4年間研究にどっぷり浸かるのも今だからこそできること。いろんな経験、出会いがあり、歯科医師として、人間としても大きく成長できるチャンスです。このことは必ず自分にとって将来、大きな糧となるはずですよ。あなたも大学院にいったみませんか？



IADR@ロンドン

大学院へ行こう

包括歯科補綴学分野 吉村将悟

包括歯科補綴学分野（義歯科）2年目の吉村将悟と申します。歯学部ニュースへ投稿させて頂くのは初となりますが、今回「大学院へ行こう」という題で原稿依頼を頂きましたので僕が大学院へ行こうと思った動機や院に入って感じたことを紹介させて頂こうと思います。

僕が包括歯科補綴学分野の大学院に進学しようと決めた大きな理由は、学生時代の臨床実習で義歯に関して大きな挫折を感じたことでした。義歯に関する診療を行ってみると、咬合採得って何が正解なのだろうか、どこまで出来ていけば次のステップに進めるのだろうかということが全く分からなくなり、パニックに陥ってしまいました。このとき感じたパニックという挫折は時間とともに悔しさへと変化し、もっと義歯がうまくなりたい、自分一人で満足のいく診療がしたいという気持ちへと変わっていきました。この気持ちがありつつ、大学でならば多くの先生の色々な方法論、技術を見て、感じ、盗むことができるかもしれないと考えたことが、僕が大学院進学を決意した理

由の一つでした。進学する上で「研究」に関する不安と経済的な問題は確かにありましたが、医局説明会などの懇親会で小野教授に相談させて頂いたとき、「経済状況が負担にならないようにしっかりと自立できる環境を目指している」、「最初は診療に集中して研究は先輩のやっていることをみながらゆっくり学んでいけばよい」という言葉を頂いたことも僕が進学へと一歩踏み出す理由でした。

親身になってくださる先生方に相談しやすい環境や、技工室での何気ない診療に関する会話も大学院ならではの特色なのかなと感じます。研究はスロースターターとなりましたが、普段の診療ともリンクした「咀嚼」に関する研究が始まり、知れば知るほど普段の臨床に生きてくるということを実感してきました。ここでは紹介しきれないことも多々ありますので、大学院進学を考えている方や少し話を聞いてみたいという方は是非とも先生方に聞いてみてください。今後を考える上できっと手助けとなるはずです！

大学院へ行こう

歯周診断・再建学分野 高見澤 圭

歯周診断・再建学分野大学院2年の高見澤圭です。2年が経過した大学院生活を振り返り、思ったことや経験したことについて書かせていただきます。

まず、大学院に進学を決めた理由についてですが、学生時代に歯周病学の授業や実習を通し、患者様の治療において歯周病学は治療方針を決定するキーポイントであり基盤になることを学生時代に学びました。それがとても興味深く、歯周治療をもっと勉強し経験してみたいと思ったのが、大学院に行こうと決めたきっかけです。

その後、私は新潟大学医学総合病院で研修を1年間過ごし、歯周診断・再建学分野に進学しました。他大学出身という不安もありましたが、8人の同期に恵まれ、研究や臨床のことなど相談でき、先輩や先生方からも沢山のことを学ぶことができ、充実した大学院生活を送ることができています。研究ではどのようにアプローチをすれば良いのか分からず行き詰まってしまうことが

あったり、臨床では大学での診療だけでなく出張先での診療も含めて悩むことが多くあります。そんな時には、諸先生方から「もっとこうしたほうが良い。こういうケースではこう。」といったアドバイスをもらえるとてもありがたい環境です。また、国外で行われた学会に参加させていただく機会をいただいた際には、準備はとても大変でしたが、度胸が付き、かけがえのない経験をすることができました。

国家試験に合格し、歯科研修医を終えてからが歯科医師のスタートラインと私は思っています。その後どのような環境に身を置くかで歯科医師人生は大きく変わると思っています。大学院は、興味を持った分野をさらに深く理解する事ができ、沢山の経験を積む事ができ、さらには臨床技術も向上できる場所です。大学院生活で得るものは、今後の自分の財産になると思います。

この文章がこれから進路を決める方への参考になればいいなと思います。

